慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	三田の史学者プロフィール
Sub Title	Profiles of historians at Keio University
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1991
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.60, No.2/3 (1991. 6) ,p.161(335)- 178(352)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	関係資料
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19910600-0161

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田の史学者プロフィール

ここで取り上げる方々は、いずれも平成三年四月現在において既に物故されている慶応義塾にゆかりのある史学者である。原則として文学部の史学科、経済学部の経済史部門で専任として長年教壇に立たれ、功労のあった諸先生について扱うことにしたが、非常勤講師として教えられた方でも、また、まったく教壇に立たなかった方々でも、三田史学の形成に重要な役割を果たしていると思われる史学者については原則にしばられることなく、執筆していく方針をとった。

項目の人名は五〇音順に配列し、出身地、生没年、大学を中心とする学歴、外国への留学歴、研究者、教育者としての経歴、代表的な業績（著書、翻訳書、専門論文）、学会活動、人物寸描等について触れ、最後に執筆者の名前を記した。

浅子勝二郎（あさこ　かつじろう）

明治三八年（一九〇五）一月、埼玉県浦和市野田に生まれる。昭和四年、慶慶應義塾大学文学部史学科卒業、直ちに同大学文学部助手、兼ねて普通部教員となった。昭和七年、同大予科教員、昭和二四年に文学部教授。四六年退職、大学名誉教授。五二年没、七二歳。専攻は日本文化史。主な論文につぎのものがある。「盧舎那仏の造立を繞って」（『日吉論叢』二）。「山と水――上代文化の研究に対する一視点としての――」（『史学』三〇―三）。「平泉文化圏の問題――藤原氏関係の諸堂宇に対する一考察――」（『史学』三一―一～四）。「近世庶民芸術・文化に関する研究――入江長八の作品を中心として――」（『史学』三六―二・三）。

柳田国男の影響をうけ、民間にあって埋もれ見失われ

てゆく歴史的事象に、愛惜の情を寄せ地道に調査し叙述しようとした。（志水　正司）

阿部　秀助（あべ　ひですけ）

明治九年（一八七六）、福岡県福岡市に生まれる。明治三六年、東京帝国大学文科大学史学科卒業。明治四〇年、慶應義塾大学予科教員となる。明治四三～四五年、経済史および経済地理研究のためドイツに留学。帰朝の後、文学科及び理財科の教授となる。彼はルドヴィヒ・リースの弟子、かつ女婿としてランケ史学の影響を受けると共に、留学中カール・ランプレヒトの経済学史からも深い影響を受けた。著書として『欧州近世史』、『日本地理論議』、『近世商業史』、『最近独逸経済史』、『独逸対列強の抗争』などがある。また主要論文に「現代の史風」（『史学雑誌』）、「宗教改革時代と資本主義」（『三田学会雑誌』）、「近代資本主義起源考」（同）がある。塾史学科開設にあたって、田中萃一郎を助けた重鎮であった。カール・ランプレヒトの学説を本邦に紹介した功は大きい。特にその経済史的側面は野村兼太郎に影響を与えたものと思われる。（坂口　昂吉）

伊木　寿一（いぎ　ひさいち）

明治十六年（一八八三）三月三日、山口県に生れる。東京帝国大学文学部卒業。史料編纂所編纂官として古文書研究に従事。明治四十三年より昭和四十五年までの長きにわたり、本塾において古文書学を講義。昭和二十六年以降、大学院の古文書学特殊研究も合せて担当した。東京大学退職後は立正大学を本務校とされ、塾では終生、非常勤講師であったが、大正時代はじめの卒業生から近年まで数多くの学生達がお世話になった。

主要著書に『日本古文書学』（雄山閣、昭和五年）がある。本書は版を重ねること十数回、その没後も装を改めて数回刊行され、五十余年の生命を持つ斯界の名著である。ほかに「書状の変遷」（岩波講座『日本史学』所収）「日本書道の変遷」（岩波講座『日本歴史』所収）がある。論文には「織田信長の印章と文書」などがある。晩年に日本古文書学会の会長をされた。

背筋をピンと伸し、古武士の風格を持った小柄な先生。辺りを払う品格が身に備っていた。昭和四十五年（一九七〇）十一月二十八日没、歳八十七。（高橋　正彦）

今宮　新（いまみや　しん）

明治三十三年（一九〇〇）、茨城県に生まれる。大正十二年、本塾大学文学部史学科を卒業、同十五年、大学予科教員に就任。田中萃一郎・幸田成友その他の先生の教えを受け、日本古代史、日独通交史の研究を志す。昭和六年より二年間欧州に留学、同十三年文学部教授、同二十二年中等部長、同二十六年文学博士。その後塾史編纂所長、文学部長、日本歴史学協会委員長を歴任、同四十四年本塾大学名誉教授となる。昭和五十七年（一九八二）逝去。先生は自由闊達で温かいお人柄の学者であり、史学者としては特に班田収授制の研究に大きな足跡を残された。その代表作である『班田収授制の研究』（龍吟社、昭和十九年）は班田制に関する最初の総合的研究書として著名である。またその中で、中田薫博士の土地私有主義学説に対し公有主義の立場から有効な批判を行なったこと、班田制の実施状況を詳細に跡付けたことは学説史上重要な意義をもつものであった。

（村山　光一）

移川子之蔵（うつしがわ　ねねぞう）

明治十七年（一八八四）、福島県二本松で生まれる。県立安積中学を卒業後渡米。イリノイ州立大学附属校、シカゴ大学を経てハーヴァード大学大学院に進み、大正六年、Ｐｈ・Ｄの学位を受ける。同時に同大学シェルドン海外留学生として東南アジア、東印度諸島に派遣され、民族学者としての第一歩を踏みだした。博士論文は、『民族誌からみたインドネシアの装飾芸術の研究』。帰国後、大正八年に慶応義塾大学文学部講師に就任。あわせて東京高商、東京商大でも教鞭をとった。

昭和三年、台北帝大の創設、文政学部土俗人種学教室の開設により、教授として迎えられた。『台湾高砂族系統所属の研究』によって昭和三年、学士院賞を受賞。以後、台北帝大土俗学教室を京城大学とともに、我国植民地とその周辺地域民族学の二大中心とすべく多大の努力を傾注した。

後に高砂族の尨大なコレクションにまで発展した台湾総督府博物館の仕事も兼務。昭和十五年、台北大文政学部長。戦後は昭和二十年一二月まで国立台湾大学文政学院に勤められ、困難な処置に当られたという。博士が渡米中指導をうけたローランド・Ｂ・ディクソン教授の『文化の成りたち』（*The Building of Cultures*, 1928）は三〇五頁ほどのさほど厚くないものであるが、文化と環

境の問題から説きおこし、一次的、二次的伝播論、文化の平行発展を論じている。台北帝大の民族学にそれがどう影響したのか、発達期の日本民族学にとり、みすごすことができない話題である。昭和二二年二月九日、急性肺炎のため逝去。復刊間もない『民族学研究』一二巻二号に馬渕東一氏が「移川子之蔵先生の追憶」を書かれ、略歴と業績目録が載せられている。（中村　孚美）

占部百太郎（うらべ　ひゃくたろう）

明治二年（一八六九）六月九日、福岡県に生れる。慶應義塾に入り、明治二六年四月、同正科を終る。明治二八年十二月、大学部文学科を卒業。その後一時『時事新報』、日刊新聞『世界之日本』の編集に従事。明治三二年二月、本塾に戻り、学務や編集などに当った。明治三九年四月より大学部予科教員として教職に転じた。明治四四年大学部文学科教員として西洋史を担当。

同年より大正二年四月まで、ヨーロッパに留学、主としてロンドン大学のスクール・オブ・エコノミックス・アンド・ポリティカルサイエンスに於いて、有名なポラード教授などの指導を受けた。帰国後は、大学部文学科及び予科の西洋史を担当。大正三年四月より、大学部政治学科に於いてイギリス憲法史も講じた。大正九年四月より、慶應義塾大学法学部教授兼文学部教授となって活躍。この間、外国留学中の研究成果をまとめた『英国会之起原並進展』と題する論文を著わし、大正十二年五月それにより法学博士を受けた。更に、同年十二年より昭和三年まで、慶應義塾の理事として学事の中枢にも参画した。理事辞任後は再び文学部教授に戻り、十六年隠退されるまで、研究・教育につくされた。昭和二十年（一九四五）逝去。

著書としては、古く明治三三年に『羅馬盛衰記』なるものがあるが、教授の本当の専門分野の著作としては、学位論文となった『英国会之起原並進展』（大正十三年、岩波書店）、大著『英国憲政史』（昭和二年、岩波書店）である。共に、ロンドン留学中の研究の成果で、メイトランド、ポラードの影響が強く、当時の最新学説を消化吸収された著作であった。前者は、中世イギリス議会の起原を論じた専門論文で当時としては珍しい。後者はポラード説を軸に、当時の最新の学説を取捨してまとめた、学問的な我国最初のイギリス憲政史の全史で、出版当時、仲々高い評価を得た名著であった。教授の学風は、一部のアメリカの大学に見られる、イギリス憲政史とヨー

ロッパ中世史とを共に専門とし、また、一般歴史と並んで政治学、政治思想にも造詣ある学者であった。

以上の他に、Oulardに準拠された『占部仏蘭西革命史論』（大正十一年）や、極めて早い時期に、単なる外交史に倦きたらず『近代国際関係史』などという新鮮なタイトルの著書もある。教授は、本塾で初めて中世史を専門に講ぜられた専任教授であった。中世史の分野では、上に記した学位論文の他に、『史学』に発表された論文や、有名なLord Bryceの*The Holy Roman Empire*を訳して、『神聖ローマ帝国史』として田中萃一郎監修の「泰西歴史名著叢書」の一冊として出版している。

一九世紀的イギリスの古典的自由主義の色濃い史風の学者であった。また、「国際政治史」というような時代を先取りするような題を選ばれるなど、かつての慶應のモダンな学風をもつ学者でもあったようである。

（森岡敬一郎）

大山　柏（おおやま　かしわ）

明治二十二（一八八九）年生れ。戦前における塾史学科の人類学を隔年に担当し、基礎史前学を講義した。幕末維新にかけて、西郷隆盛とともに活躍し、日本陸軍の創設に深く係わった大山巌の次男として生れた。軍人を継ぐべき立場にあった大山が、いかなる理由で考古学、人類学を志すに至ったかはわからない。しかし、大正十三年の渡欧では、当時ヨーロッパの学会の重鎮であったフーベルト・シュミット、トムゼン、ブロイ、さらには当時マドリッド大学にいたオーバーマイヤーなどに指導を受け、さらにデンマーク、ドイツ、フランス、イタリア、ギリシアなどの遺跡を歴訪するなど、戦前におけるヨーロッパ先史学の成果を幅広く吸収した。帰国後自宅のあった渋谷区穏田に大山史前学研究所を創設し、雑誌『史前学雑誌』を刊行した。豊かな学際性と体系的な構成を持った大山の「史前学」は、晩年に師事した清水潤三を通して、今日の塾の考古学研究に引き継がれている。

（鈴木　公雄）

幸田　成友（こうだ　しげとも）

明治六年（一八七三）、旧幕臣幸田成延の五男として神田山本町に生れる。東京帝国大学在学中、独人教師リースの影響を受け、西洋の新研究法による国史の研究を志し、明治二九年、同大学史学科卒業後、大学院に進む。職歴としては、大阪市史編纂主任（明治三五―四

二）。義塾史学科教員（明治四三～昭和十九）。臨時帝室編纂官（大正七－一一）。一橋大学教官（大正十一－昭和十五）を歴任、オランダに留学（昭和三－五年）、文学博士（昭和五年）。主要著作に『大塩平八郎』（明治三五年、昭和一八年増補改訂）、『大阪市史』六巻（明治四四－大正三）、『日本経済史研究』（昭和三年）、『江戸と大阪』（昭和九年、一七増補）『日欧通交史』（昭和一七年）、『書誌学』（慶應通信教材、昭和二四年）等がある。飜譯書に『一九世紀史』（ロバート・マッケンジ著、明治二九年）、『日本大王國志』（フランソア・カロン著、昭和二三年）がある。近世を中心とする社会経済史及び対外交渉史の分野に渉る、多くの実証的研究による体系づけを行なった。また愛書・蒐集家でもあり、留学時サンデの『遣欧使節記』をはじめ、貴重な日欧通交史・耶蘇教史関係書等を蒐集帰国した功績も高く評価されている。今日は『幸田成友著作集』全八巻（昭和四九年）により、その業績に容易に接することが出来る。昭和二十九年（一九五四）没。

（河北　展生）

小林高四郎（こばやし　たかしろう）

明治三八年（一九〇五）五月七日、新潟県に生まれる。昭和五年、塾文学部支那文学科卒、直ちに助手となる。在学中より加藤繁博士に師事し、先ず唐宋経済史研究に着手した。昭和八年から十一年にわたる北京留学を機に、当時未踏の元代経済史研究を志し、モンゴル語研究をカラチン右旗の汪文田のもとで深め、北京大学にて姚従吾教授の講筵に列した。帰国後助教授となり、その後外務省に招かれ調査部々員となる。大戦中駐トルコ大使館に勤務。戦後横浜国立大学教授、神奈川県立外国語短期大学教授を歴任した。その業績は、大きく四つに区分できよう。第一は、モンゴル史・元朝史上の重要問題、例えばモンゴル人の飲物・歳月名、元代色目人の高利貸「斡脱」、モンゴル支配層の所領「投下」等々に関し、モンゴル語の該博な知識を駆使して先駆的論文を発表、主なものは『モンゴル史論考』（昭和五八年）に収録。第二に『元朝秘史』を文献学的・言語学的に研究した『元朝秘史の研究』（昭和二九年）。第三に、元代法制史料として難解な『元史刑法志』、『通制条格』の訳註作業に、前後二十年にわたり指導的役割を果たした。第四に啓蒙的業績として、モンゴル民族の古典を訳した『邦訳アルタン＝トプチ』（昭和十四年）、『蒙古の秘史』（昭和十六年）、『蒙古黄金史』（昭和十六年）があり、さらに『東

西文化の交流』（昭和二六年）、『ジンギスカン』（昭和四十年）、『元史』（昭和四七年）などもある。また、自らのドイツ語学習の一端を民俗学的見地から著した『ドイツ語のこころ』、稀書珍籍の収集家としての『古本随筆・漁書のすさび』などの著作もある。最後に特筆すべきことは、駐トルコ大使館勤務の傍ら、私費を投じてイスタンブル大学及びトプカプ・サライ所蔵のペルシア語、アラビア語、トルコ語の東洋学関係の古写本をフィルムに収め、あるいはそれらの諸国語の刊本を日本に将来したことである。昭和六二年一月二日没。

（野口　周一）

柴田　常恵（しばた　じょうけい）

明治十年（一八七七）、名古屋市東区大曽根町にあった瑞忍寺に生れる。上京し、郁文館中学に学ぶ。坪井正五郎にすすめられ、創立間もない東京帝国大学理科大学人類学教室の傭となる。後に助手となり、東京人類学雑誌の編集にも携わった。大正六年、東京帝国大学理科大学人類学教室編纂の第四版『日本石器時代人民遺物発見地名表』は柴田が編集にあたったものである。大正九年、内務省に移り、史蹟名勝天然紀念物調査委員として史蹟名勝の調査、保存に日本各地を歩いた。また一九五〇年代に入ってから文化財保護委員会発足とともに文化財専門審議会委員として盡力された。

昭和四年より塾文学部講師に就任。一五年の長きにわたって考古学の講義を担当した。また日吉近傍の矢上、南加瀬古墳の調査なども氏の指導によるものであった。昭和十二年、塾の中国考古学調査団（松本信広教授、大山柏、柴田常恵氏ら）の派遣も氏の努力によって実現を見たところが多いという。今日の塾民族学・考古学研究室の揺籃期の基礎を築かれた一人である。

（江坂　輝弥）

清水　潤三（しみず　じゅんぞう）

大正五年（一九一六）東京生れ。大山柏、柴田常恵、藤田亮策に考古学を、松本信広に民族学を、松本芳夫に国史学をそれぞれ師事し、考古学の研究を行った。始めは歴史考古学とくに奈良時代都城址、寺院址の研究を志したが、やがて古代蝦夷と縄文時代の研究に主力を注ぐようになった。また藤田亮策、松本信広両教授の研究調査に協力し、各地の遺跡の調査で重要な役割を果たした。とくに松本教授の先史時代丸木舟の研究においては、そ

の殆どの発掘調査を担当し、多くの成果を上げた。国史学専攻の教授として、創設期の民族学・考古学研究室の充実に努力を傾け、近森正、渡辺誠、赤沢威、鈴木公雄、田辺征夫、藤村東男、阿部祥人、小宮孟、山下秀樹など多くの塾出身の考古学研究者を育成した。大山柏の基礎史前学を最も正統的に継承し、日本考古学の方法論の体系化を志そうとしていたが、晩年に健康をそこない、十分な活躍ができなかったのは惜しまれてならない。

（鈴木　公雄）

高橋　磧一（たかはし　しんいち）

大正二年（一九一三）、東京に生れる。暁星中学校から慶應義塾大学予科に入学、昭和十一年、文学部史学科卒業。幸田成友教授に師事し、同門の後輩に金川太郎、林基の両氏がいた。卒論「幕末貨幣問題に関する若干の資料」は『史学』（一七―二～三、一八―一）に連載。歴史学研究会で活躍、大学院在籍中に羽仁五郎氏の影響をうけた『洋学論』を出し、暁星中学校教諭となる。戦後は民科歴史部会（『歴史評論』編集長）、歴史教育者協議会（のち委員長）などの歴史・歴史教育学界や、平和問題で指導的役割を果した（歴史教科書執筆、日本歴史学協会常任委員、学術会議会員など）。その間も著作・講演と洋学史研究をつづけ（『歴史教育論』、『洋学思想史論』他）、高野長英賞を受賞する。著書『歴史教育とわが人生』は生涯在野精神を貫いた氏の歴史研究の動機と歩みについて語る。『高橋磧一著作集』（全十五巻）がある。昭和六〇年（一九八五）没。

（山田　忠雄）

高村　象平（たかむら　しょうへい）

明治三八年（一九〇五）、東京に生まれる。昭和四年、慶應義塾大学経済学部卒業。卒業論文のテーマはクライミング・ボーイ。同年助手となり、ヨーロッパ経済史研究に従事。昭和十―十二年、ドイツに留学、中世ドイツハンザ研究を行う。帰国後、『近世経済史』、『一般経済史』、『西洋経済史』等を担当。昭和十四年、経済学部教授（昭和四六年定年退職まで）。昭和三十―三二年、経済学部長。昭和三三―三五年、図書館長。昭和三五年、学位論文『ドイツ・ハンザの研究』により経済学博士。昭和三五―四十年、慶應義塾長。昭和五二年、中央教育審議会会長。昭和五四年、日本学士院会員。平成元年没、八三歳。

主著：『日葡交通史』（昭和十七年）。『ドイツ中世都市』

（昭和三四年）。『ドイツ・ハンザの研究』（昭和三四年）。

（速水　融）

竹越　三叉（たけごし　さんさ）

慶応元年（一八六五）、新潟県中頸城郡柏崎町清野仙三郎の次男として出生。本名与三郎。のち伯父竹越藤平の養子となる。明治一三年、向学心に燃えて出奔上京、中村正直の同人社に入り、翌年慶応義塾に転ず。自活の為に「時事新報」に入るも周囲と意見合わず、長文の批判文を残して明治一六年三田を去る。以後二八年まで福沢に会わず。前橋英学校、「大阪公論」、「国民新聞」をへて、二八年雑誌「世界之日本」創刊。西園寺の知遇をえて、第三次伊藤内閣で文部省勅任参事官就任。明治三五年以来衆議院当選五回。その後貴族院議員に転じた。昭和一五年枢密顧問官。政治的には一貫して藩閥・軍閥批判の立場を堅持した。昭和二五（一九五〇）年没。蘇峰、愛山とともに民友社系の史論史学の中心の一人であった。代表作は『新日本史』上・中（明治二四・二五年）、『二千五百年史』（明治二九年）、「日本経済史」（大正八年。英訳はロンドン、昭和五年）。（坂井　達朗）

田中萃一郎（たなか　すいいちろう）

明治六年（一八七三）、静岡県に生まれる。慶應義塾大学部文学科の第一回生としてリースに指導を受け、明治二五年に卒業、明治三二年同大学部教員となり、予科と普通科で歴史を講じた。明治三八年ロンドン大学、翌年ライプチヒ大学に学び、ラムプレヒト等に師事した。

帰国後の明治四一年、慶應義塾大学部の政治科および文学科の教員となり、二年後文学科に史学専攻の学科を創設した。同年にはまた三田史学会を起こし、機関誌『史学』の発刊に尽した。爾来二三年（大正一二年）に急逝するまで史学の教員として中心的役割を果たした。

『東邦近世史』、『ドーソン蒙古史』の他、多くの著訳書や論文があり、その主なものは『田中萃一郎史学論文集』に収められている。

専門領域は東洋史から西洋史、日本史、政治学に及び、その広い学識は松本信広、間崎万里、松本芳夫らに多大な影響を与えた。草創期の日本の歴史研究の基礎を築いた人物として高い評価が与えられている。

（山本　英史）

近山　金次（ちかやま　きんじ）

明治四〇年（一九〇七）、東京都港区芝に生まれた。昭和七年、慶應義塾大学文学部を卒業、助手となる。昭和一七年、助教授。二〇年、教授。二五年、文学博士。三〇年四月より一年間、英・独・仏・伊に留学。三一年より三五年まで中等部長。四四年、三田史学会会長。四七年、慶應義塾賞受賞。四八年、定年退職し、名誉教授。清泉女子大学教授に就任した。著書に『アウグスチヌスと歴史的世界』（慶應通信）。主要論文として「チベリウス帝論攷」、「ミラノ勅令前後」（以上「史学」所収）等がある。訳書にカエサル著『ガリア戦記』（岩波文庫）がある。

生涯の前半においては、ローマ史の研究に専心し、特に『ガリア戦記』、及びローマ皇帝たちの考察において優れた業績を残した。また生涯の後半においては、アウグスチヌスを中心に、中世キリスト教世界の研究において多くの成果を挙げた。その学風は、徹底した原典主義と華麗な叙述を特色とし、カトリシズムに深く根ざした諸論文は本邦で独自の価値をもっている。昭和五〇年（一九七五）没。

（坂口　昂吉）

橋本　増吉（はしもと　ますきち）

明治一三年（一八八〇）、長崎県諫早村（現諫早市）に生まれる。県立長崎中学、旧制第六高等学校をへて東京帝国大学文科史学科に進み、白鳥庫吉、市村瓚次郎等の指導をうけた。羽田亨、原田淑人等と同学。明治四一年卒業。早稲田大学史学科講師等を歴任して、のち慶應義塾大学に移る。大正九年より昭和十九年まで教授として東洋史、史学研究法等を担当。昭和十五年より東洋大学教授を兼任、この間大亜細亜協会の理事に就任、日本世界史研究所を創設し、日本中心の世界史の編纂を計画、また松井石根陸軍大将等と図り如月会を組織し南方圏の研究並びに東南アジア留学生の輔導をはかる等、時勢の国家主義的歩みに連動し実践的活動をする。昭和二〇年東洋大学長。翌年公職追放にあい一旦教職離脱、のち慶大大学院で講師。著書に『東洋史上より見たる日本上古史研究』、『東洋古代史』、『支那古代暦法史研究（学位論文）』等。伝統的シナ学の疑古派に属す。早くから耶馬台国の研究を進め九州説を唱えた。

（伊藤　清司）

那珂通世（なか　みちよ）

嘉永四年（一八五一）、南部藩の城下盛岡に小身の武

士の子として生まれる。幼少時は藩校の明義堂に通い、和漢の学を修める。明治維新を境に英学を修めることを決心、上京してはじめ明治義塾に入るが、明治五年、改めて慶応義塾の変則科（速成科）に入学、福沢家の書生となる。明治八年、福沢諭吉の推薦で毛利藩が萩に開いた洋学校＝巴城学舎の英語教師となる。間もなくして福沢に呼び返えされ、二七才の若さで千葉師範学校、および付設の女子師範学校、中学校の校長に抜擢される。そこで学則、カリキュラム、教科書づくりに腕を奮った。その後、中村正直に見いだされて東京女子師範学校の教頭、のちに校長として女子教育の改革に辣腕を奮うが、文部大臣森有礼の国家主義的教育方針に反発して辞職。元老院の書記官時代に、独学で史学の途に志すようになる。アジア諸国の歴史に文明史論的な教科書がないことを痛感、明治二一年、『支那通史』全六冊を刊行した。この著述の過程で元朝史研究にモンゴル語が必要なことを悟り、シュミットの『モンゴル語文典』を自学自習、明治三四年、『元朝秘史』の写本を手に入れたのをきっかけに、その訳注に没頭、明治四〇年、畢生の訳業として『成吉思汗実録』を刊行した。また、リースの近代的考証主義にも刺激されて「上世紀年考」等以下のすぐれた日本古代史関係の論文も発表した。第一高等中学校、高等師範学校の教授としての研究、教育の経験からヨーロッパ史とアジア史とを別個の領域として分離、独立すべきことを主張、中等教育のカリキュラムにおいて「西洋史」、「東洋史」という新区分を実現させた。慶応義塾初期の卒業生であるにもかかわらず、もっぱら官立の学校で教鞭をとったため白鳥庫吉、箭内亘等東大系の東洋史学者に多大の影響を与えたが、田中萃一郎にも感化を及ぼしたことは無視できない。明治四一年（一九〇八）、突然襲った心臓発作のため死去。享年五八。

（坂本　勉）

中井　信彦（なかい　のぶひこ）

大正五年（一九一六）、台湾台北市で生れ、東京で育つ。昭和一三年、慶応義塾大学文学部史学科卒業。古代人の心に関心を抱き、民衆の意識史を終生底流する課題とした。幸田成友に実証史学を、私淑した柳田国男に学問のあり方を学ぶ。昭和一四年、三井文庫編纂員、二六年、杉野女子短期大学教授、三八年、慶応義塾大学文学部教授（社会学専攻）四六年、史学科に移籍、五七年愛知大学客員教授を歴任。この間東北大学などにも出講。

三井文庫及び斯道文庫長を兼ね、史料保存や日本古文書学会の発展にも尽くした。平成二年（一九九〇）没。著書は『幕藩社会と商品流通』、『大原幽学』、『町人』、『転換期幕藩制の研究』、『歴史学的方法の基準』、『色川三中の研究』など。主分野とした幕藩社会史で商品流通からの視角を導入し新局面を開いたが、柳田学を再構成した三次元的歴史構造論の構築は比類ない業績である。実証・理論両面に優れた力量を持ち、厳しい内省を実践した人であった。

（田中　康雄）

野村兼太郎（のむら　かねたろう）

明治二九年（一八九六）、東京に生まれる。大正七年、慶應義塾大学理財科卒業。卒業論文のテーマは歴史哲学。同年助手となり、研究主題を次第に経済史に移す。大正十一―十四年、ヨーロッパ、とくに英国に留学。帰国後経済学部教授。「商業史」担当。英国資本主義発達史を研究。昭和五年ごろより、日本経済史、経済思想史に関心を移す。「近世経済史」、「一般経済史」、「日本経済史」、「日本経済思想史」等を担当。昭和八年、慶應義塾経済史学会を創立。この頃より、近世農村、商家史料による実証研究を実施。昭和十二年、学位論文『英国資本主義の成立過程』により経済学博士。昭和十七―二一年、経済学部長。昭和十九―三三年、図書館長。昭和二一―三五年、社会経済史学会代表理事。昭和二五年日本学士院会員、昭和三五年没、六四歳。

主著：『英国資本主義の成立過程』（昭和十二年）、『五人組帳の研究』（昭和十八年）、『村明細帳の研究』（昭和二四年）、『江戸』（昭和三三年）。

（速水　融）

羽原　又吉（はばら　ゆうきち）

明治十五年（一八八二）、大分県久住に生まれる。済済黌中学をへて明治四二年、東京帝国大学理科大学動物学科を卒業。初め水産講習所、次いで北海道庁で水産資源の研究に従ったが、次第に漁業経済史への傾倒を深め、水産講習所に復帰、公務のかたわら全国の漁村を探訪し、漁業経済史の分野を独力で開拓、体系だてた。昭和二二年、塾経済学部非常勤講師、昭和二四年、専任講師となり、以後昭和三九年、経済学部教授を辞すまで漁業経済史を講ずる。この間、昭和二五年、経済学博士（慶応義塾大学）、慶応義塾賞、昭和二六年朝日文化賞、昭和三〇年、日本学士院賞を受け、また日本常民文化研究所常務理事、史料館評議員、社会経済史学会顧問をつとめる。

昭和四四年没。著書に『アイヌ社会経済史』（昭和十四年）、『支那輸出日本昆布業資本主義史』（昭和十五年）、『日本古代漁業経済史』（昭和二四年）、『日本漁業経済史』（四二巻、昭和三二年）などがある。

（可児　弘明）

藤田　亮策（ふじた　りょうさく）

明治二五年（一八九二）生まれ。戦後の塾史学科において考古学の講義を担当するとともに、清水潤三、江坂輝弥らの後進の研究者の指導を行った。青森県亀岡遺跡、千葉県加茂遺跡、福島県真野古墳群等の調査を実施した。始めは医者を志したが、歴史学・考古学を専攻した。東京帝国大学史学科を卒業後、維新史料編纂官補をへて朝鮮総督府博物館の建設に従事し、朝鮮各地の先史時代遺跡の調査を実施した。さらに京城帝国大学教授となり朝鮮史学第一講座を担当し、多くの考古学研究者の指導と教育にあたった。戦後は塾および東京芸術大学で教鞭をとり、昭和二三年（一九四八）に設立された日本考古学協会の初代委員長に就任した。日本学術会議会員、文化財審議会専門委員等を歴任、昭和三四年（一九五九）に国立奈良文化財研究所所長に就任した。温厚な人柄のなかにも、厳しい野外考古学の姿勢をつらぬき、戦後の塾の考古学・民族学研究室の礎を築くのに尽力した。

（鈴木　公雄）

船田　三郎（ふなだ　さぶろう）

明治十四年（一八八一）、福島県に生まれる。二高より同三十六年東京帝国大学文科大学哲学科入学。ケーベル、井上哲次郎教授に就きスピノザを研究。同三十九年卒、翌四十年（一九〇七）慶応義塾大学予科教授に就任。ドイツ語、論理学を教える。大正七年（一九一八）田中萃一郎教授より委託されて日本で最初に「歴史哲学」を講義。同十一年よりベルリン、パリ、ロンドン、アメリカに留学。同十三年（一九二四）帰朝後文学部教授になる。哲学概論、古代哲学史、歴史哲学、哲学演習を教える。特に歴史哲学は慶応独自の講義で知られ、東大の教授等も聴きにきたという。昭和十九年（一九四四）退職、名誉教授。大平洋戦争で戦災に遭い蔵書をすべて失った上、病いに倒れ、同二十五年（一九五〇）歿。重厚な学風、温厚な人柄、講義は緻密だが明快で多くの学生を育てた。講義にすべてを賭けて著書を残さなかったが、西洋哲学の移植期に最大の貢献をした。お酒が好きで文楽

の愛好家、そういえば風貌が文五郎名人によく似ている。

（神山　四郎）

前嶋　信次（まえじま　しんじ）

明治三六年、山梨県南八代村に江戸時代よりつづく医者の旧家に生まれる。はじめ文学を志して上京、東京外国語学校仏語部に入り、卒業したが、思うところあって専門を変え、東京帝国大学文学部東洋史学科に転じた。昭和三年、卒業と同時に恩師の藤田豊八に従って台北帝国大学文政学部の助手に就任するも、わずか四年でその職を辞し、以後、八年余りを台南第一中学校の歴史教師として台湾で過ごした。昭和一五年、東京に戻り、満鉄東亜経済調査局に入社。大川周明顧問の下で西南アジア班に属し、本格的なイスラム史研究のスタートをきった。敗戦によって職を失ったが、昭和二五年、慶応義塾大学付属語学研究所々員となり、二九年、文学部史学科東洋史専攻の専任講師に移籍、三一年、教授に就任してから四六年、定年で退職するまで学生、後進の指導にあたった。編著書、翻訳書、論文は多数にのぼるが、主たる論文は『東西文化交流の諸相』（全四巻、誠文堂新光社）におさめられている。概説書の代表作に『イスラムの蔭に』（河出書房新社）、主要な翻訳書に『アラビアン・ナイト』（平凡社）がある。書くものはいずれも実証をふまえながらも詩心に満ちた流麗な文章からなっており、その温和、慈愛溢れる人柄とあいまって多くの人びとの敬愛を集めた。昭和五九年、七九歳で心不全のため逝去。

（坂本　勉）

間崎　万里（まざき　ばんり）

明治二一年（一八八八）六月七日、高知県の西部、四万十川上流の幡多郡西土佐村津野川五一番地に生れた。生家は郷士の家柄。自由民権運動の伝統もあり、慶應義塾の塾風を慕って明治二八年、慶應義塾普通部に入学、大正三年、同大学文学部史学科卒業。大正一四年九月より二年半ヨーロッパ留学、昭和四年、同大学教授を経て昭和三七年、同大学名誉教授、昭和三九年九月一五日死去。

その学風はリベラリズムに根ざし、ベルンハイム流の近代歴史学の方法を基盤とし、しかも些末事実主義に堕することなく全般的叙述をめざす実証主義であった。先生の仕事で特筆すべきは英国自治領制度の研究と、人文地理学等の成果を取り入れて全体史的、文化史的綜合を

指向する邦訳書で、特にハンチントンの「気候と文明」は今も一読の価値をもつ。大らかさと頑固さ、いわゆる土佐人のいごっそうな人柄は親愛の情をもって語られている。

（米田　治）

松本　信廣（まつもと　のぶひろ）

明治三〇年（一八九七）、東京市芝区（現東京都港区）に生まれる。慶応義塾普通部、大学予科をへて大正九年文学部史学科卒。普通部教員に就任後、大正十三年仏国ソルボンヌ大学に留学。在学中M・モースやM・グラネー、J・プシルスキー等の薫陶をうけた。国家学位を取得。昭和三年帰国後、義塾文学部助教授、のち教授として東洋史・民族学を講じた。学内では文学部長、大学院文学研究科委員長、言語文化研究所長等、学外では日本民族学協会委員長、日本歴史学協会委員長、東南アジア史学会長等を歴任。大学在学中、田中萃一郎、加藤繁、移川子之蔵等の感化をうけ、特に柳田国男との出会いが学問の方向を決定づけた。『日本神話の研究』、『印度支那の民族と文化』、『東亜民族文化論攷』等著書多数。仏国社会派に属し歴史民族学的研究法をとった。研究領域は広く、日本神話、日本民族文化の南方起源、東南アジア民族文化の研究では草分け的存在。趣味なく、学問一途の生涯を過ごした。昭和五六年（一九八一）没。

（伊藤　清司）

松本　芳夫（まつもと　よしお）

明治二六年（一八九三）、和歌山県東牟婁郡下里村に生れる。中学のとき上京。長兄（東大法卒、早逝）の感化によりキリスト教に入信。また絵画・和歌・俳句にも興味を示す。大正三年、設置後間もない塾文学科の史学科に入学、田中萃一郎の指導を受け、また、川合貞一の民族心理学的方法にも影響された。津田左右吉『神代史の新しい研究』に対しこれを批判的に論じた卒業論文がその学問研究の出発点となった。

以後、田中の下で史学科の発展につとめ、松本信広らと計り機関誌『史学』の発刊に尽力した。昭和六年、文学部助教授、昭和八年、同教授となる。一方、柳田国男の民俗学にも終生深い関心を寄せ、『熊野民謡集』（大正十一年）『熊野民俗記』（昭和十八年）を刊行。その主著に『古代日本人の思想』（昭和三四年）ほかがある。戦前からの論文が纏められたが、戦後活発になった新しい見解には余り関心が示されていない。昭和二八年以後、

学部長・研究所長などを歴任し後進の育成に当った。

（太田　次男）

三宅　米吉（みやけ　よねきち）

万延元年（一八六〇）、和歌山藩士栄充の長男として城下に出生。藩学学習館に学び、明治五年、慶応義塾入社、童子局で高嶺秀夫等に学ぶ。同八年退学。以後在塾中に修得した英語力をもって、独学で日本古代史、考古学等を修める。東京師範学校、金港堂書店に勤務。アメリカ及びイギリスに留学。のち東京高等師範学校教授、同校校長、東京文理科大学学長兼教授、東京帝室博物館総長等を歴任した。職場に塾の先輩高嶺秀夫、那珂通世があった。明治二四年、「考古学会」の設立に参加、会長を勤めた。文学博士。昭和四年（一九二九）没。明治一九年、『日本史学提要』でギゾー、バックルに代表される「文明史」と、コント、スペンサーの「社会学」の方法を援用し、漢学や国学の伝統に立つそれまでの国史の研究が省みなかった遺跡・遺物を史料として用いる新しい実証的研究方法を提唱した。『文学博士三宅米吉著述集』（上・下、目黒書店、昭和四年）がある。

（坂井　達朗）

宮本　延人（みやもと　のぶと）

明治三四年（一九〇一）、長野県上田市に誕生。東海大学刊行の雑誌『松前文庫』に載せた回想によると、関東大震災前、東京都港区の松本信広先生を訪ね、慶應義塾大学文学部史学科に進学の決心をされたという。昭和三年三月、文学部史学科を卒業、当時文学部で人類学の講義を担当されていた移川子之蔵教授が同年四月開校の台北帝国大学文政学部土俗人種学教室の主任教授として赴任されるに伴い、助手として同行。昭和二三年、日本に帰国されるまで、台湾の山地、東海岸に住む台湾の少数民族の土俗学、文化人類学的研究、台湾の先史時代遺跡の調査に没頭、多くの業績を残した。昭和二一年から三年間、中華民国国立台湾大学教授として残られ、今日の同大学文学院人類学系研究室発展の基礎を築いて帰国した。今日、同大学人類学系の元老格の宋文薫教授など、先生に教えを受けた学者は数多い。帰国後、創立間もない東海大学教授となり、昭和四七年、定年退職まで同大学で人類学の講義を担当した。塾でも法学部の人類学の講義を昭和四一年まで講師として担当。クリスチャンの奥様を先に亡くされ昭和六三年七月、満八七才で逝去された。

（江坂　輝弥）

山路　愛山（やまじ　あいざん）

元治元年（一八六五）、幕府天文方であった一郎の長男として江戸に出生。本名弥吉。明治二年、静岡へ移住。静岡英学校、東洋英和学校（東京麻布）に学ぶ。明治二〇年、頼山陽に倣って「史学文章」で世に立つことを決心。キリスト教に入信、静岡県下で代用牧師をした後、明治二五年、徳富蘇峰の要請により上京、「民友社」入社、同三〇年迄在職。その後、毛利家編纂所、信濃毎日新聞主筆等を勤め、雑誌『独立評論』を創刊。晩年には早稲田大学、慶応義塾大学文学部（明治四三年度国史）、同志社大学で教壇に立った。大正六年（一九一七）没。当時アカデミズムで支配的であった考証史学を批判し、史学は正確な事実を基礎にしてその上で「国家発展の法則を研究すべき科学」であると主張した。著書・論文は非常に多いが、「明治文学全集」（筑摩書房）及び「民友社思想文学叢書」（三一書房）の『山路愛山集』が入手しやすい。

（坂井　達朗）

吉田小五郎（よしだ　こごろう）

明治三五年（一九〇二）、新潟県柏崎市に生れる。大正一三年、慶大文学部史学科卒業。在学中、幸田成友の講莚に列し、実証主義に基づく学風を師から受継ぎ、史料の選択には厳しくオリジナルに還えることを志した。卒業後、幼稚舎の教員を勤めつつ、日本と西洋の接点に関心を持つ長兄正太郎の影響もあって、学生の頃からのキリシタン史研究を本格的に開始。日本側史料の乏しさから外国人の手になる基本的文献の移植を重視。昭和五年、シュタイシェンの『キリシタン大名記』、昭和十三―十五年レオン・パジェスの『日本切支丹宗門史』（三分冊、岩波文庫）を訳出し、又昭和七年には日本で最初の堅固な『ザビエル伝』を著し、斯学を志す人の必読の書となった。昭和十四年、柳谷武夫らと共にキリシタン文化研究会を設立し、昭和二三―二四年文学部から請われてキリシタン史の講座を持った。昭和五八年（一九八三）、出生地で没。

（岩谷十二郎）

リース、ルドヴィッヒ

一八六一年、北ドイツのクローネ市に生まれる。ベルリン大学で歴史学を学び、「イギリス議会総選挙の歴史」によって学位を得た（この論文は今日においても高く評価されている）。近代史学の父と云われたランケは当時大学を退いていたが、ランケの筆耕をつとめ、親しく彼

に接してランケの崇拝者となった。

一八八六（明治十九）年二月、ハンス・デルブリュックの推薦で東京帝国大学の講師となり、一九〇二（明治三五）年まで勤務した。史学科で史学研究法、文明史等を講義した。一八九九（明治二二）年、東京帝国大学に史学科の他に国史学科が新設されると、意見書を提出してその内容と任務について指示を与えた。史料の編纂を目的とする史料編纂掛や歴史学の学会である史学会の設立は、師ランケの史料批判に基づく近代歴史学を紹介することによって、日本におけるアカデミズム史学の成立に貢献した。慶應では一八九一―九三（明治二四―二六）年に非常勤講師として教壇に立ち、田中萃一郎等に多大の感化を与えた。

（東畑　隆介）